

小林萬吾

経塚朋子

小林萬吾（明治三年～昭和二年）は洋画家。東京美術学校教授。その名を聞いたことがなくとも、明治、大正、昭和初期の「心の花」誌を手にとったことがあるはずだ。数年前「心の花」明治三五年の表紙絵のA4ファイルも作られているので、ご存知の方も多いだろう。萬吾は明治三二年より昭和一九年まで実に四十五年にわたって「心の花」の表紙と挿絵を描き続けた。心の花の歴史の実に三分の一。どのように彼は「心の花」と関わりを持つようになったのか。「心の花」明治三二年一号雑報欄に「本誌の表紙は白馬会の敏腕小林萬吾氏に依頼」とあり、彼は梅花の散る水辺を描いている。この時はまだ東京美術学校を卒業したばかり。これより以前「心の花」創刊号の表紙は同じく東京美術学校の教授川崎千虎が手掛けたが、いわゆる東京美術学校騒動により排斥された岡倉天心に従い辞職、

日本美術院設立に尽力したために、後は若い萬吾に託されたのだ。何故若い画家の中から萬吾が選ばれたのかはわからない。前任の千虎の推薦によって「心の花」との縁が結ばれたのかもしれないが、そののちは「心の花」編集人石樽千亦の存在が大きいと思う。千亦と萬吾の出身は四国、伊予の東と讃岐の西のごく近い土地だ。同郷の後輩を千亦は大切にしたのでだろう。また、萬吾の穏やかで円満な人柄も大きな要因の一つと思う。信綱は『明治大正昭和の人々』で「君は温厚の君子人で、しかも確固たる信念を持つてをられた」とし、長きにわたる貢献に謝辞を述べている。

明治三七年の千亦と萬吾の共著『二人づれ―写生帖―』では千亦が文を書き、萬吾は挿絵を描き、武相の旅行記を綴っている。よほど気が合わねば二人で旅はしないだろう。『二人連れ』で二人が訪れたのは今の国道20号高尾から神奈川県緑区の藤野の辺り。藤野

にお住まいの齋藤佐知子さんが地元の方と読書会をなさり、地名などを読み解いてくださった。萬吾の挿絵は当時の風景、人物を写真したもので、風俗や風景を中心とした彼の穏健な画風を伝えている。

萬吾は歌を残していないが、誌上にエッセイがある。明治四四年より大正三年まで文部省派遣により、フランス、イタリア、ドイツに留学、その旅行記は「心の花」に随時掲載された。「巴里より」「フランス」「マルケン行き」（オランダ、マルケン島）「フロランスの一日」（イタリア、フィレンツェ）「ヴェニスとブルタニユ」（イタリア、フランス）「コルドバ」（スペイン）「トロー」（スペイン、闘牛）「伊太利行脚（其一）（其三）」。風俗や自然を見、土地の人々と交流し、美術を鑑賞し、行く先々でスケッチをして帰国後の資料とした。闘牛について「此日は実に幾万人集つたのであろうか、併し予はトローは二度と見るべきものではないと思つた。」と、はっきり意見を述べているのが印象的だった。

最晩年は健康がすぐれなかつたのか、「心の花」表紙は昭和一九年二月号の松と富士山の絵まで。昭和二年には脳溢血で不自由な身となり、翌年逝去した。